

JMMA

JAPAN MUSEUM MANAGEMENT ACADEMY

No. **71** Vol.19-2
October 2014



特別講演 石戸 奈々子 氏

第15回学会賞受賞者



パネルディスカッションの様子



亀井 修 氏



松本 栄寿 氏



湯浅 万紀子 氏



株式会社 江ノ島マリンコーポレーション
堀 由紀子 氏

Contents

【JMMA第19回大会】

【特集 第19回大会 (第1日目)】

- 2 プログラム
- 4 JMMA第19回大会 会長挨拶 大堀 哲 (JMMA会長、長崎歴史文化博物館館長)
- 5 JMMA第19回大会 開催の趣旨 高安 礼士 (JMMA副会長・大会実行委員長、千葉市科学館)
- 7 特別講演「ミュージアムがおこす新しい風ー子供のためにできることー」... 石戸 奈々子 (NPO法人 CANVAS理事長)
- 12 指定討論「社会のためのミュージアムーミュージアムがおこす新しい風ー」パネルディスカッションの趣旨
..... 田代 英俊 (JMMA理事、公益財団法人日本科学技術振興財団・科学技術館)
- 14 指定討論「人びとと社会をつなげるミュージアムの役割」
~東京都美術館×東京藝術大学「とびらプロジェクト」と「Museum Start あいうえの」の取組み 伊藤 達矢 (東京藝術大学美術学部)
- 17 指定討論「ルーヴル-DNP ミュージアムラボ活動紹介」 久永 一郎 (大日本印刷(株) C&I 事業部)
- 20 指定討論「ロケ誘致によるフィールド・ミュージアム構想の実現」 土井 義行 (常総市役所産業労働部商工観光課)
- 22 【海外交流事業】「韓日研究国際フォーラム①」(日本側発表) 緒方 泉 (九州産業大学美術館教授)
- 25 【海外交流事業】「韓日研究国際フォーラム②」(韓国側発表) 黒岩 啓子 (Learning Innovation Network代表)
- 28 【インフォメーション】JMMA20周年記念大会開催日程・会場決定!、新規入会者紹介、法人会員一覧

特集

2014年5月31日(土)・6月1日(日)
に東京家政学院大学にて開催
しました第19回大会を2号にわたり
特集して報告します。

日 程：平成26年5月31日(土)～6月1日(日)
場 所：東京家政学院大学(東京都千代田区三番町22番地)
テ ー マ：「社会のためのミュージアムーミュージアムがおこす新しい風ー」
共 催：学校法人 東京家政学院
参 加 費：会員1,000円(学生・法人会員も含む)
非会員一般2,000円、学生1,000円
(但し当日入会者は会員扱いとする)
情報交換会費：一般3,000円、学生1,500円
参加者数：延べ173名

[プログラム]

● 第1日目(5月31日(土)／東京家政学院大学)

時間	内 容
13:00	総 会【4階・1407教室】 (1) 会長挨拶 (2) 平成25年度事業報告 (3) 平成25年度収支決算報告 (4) 会計監査報告 (5) 会計26年度事業計画案 (6) 平成26年度収支予算案 (7) 学会賞受賞者の報告 (8) その他
13:40	開会式【4階・1407教室】 (1) 開会挨拶 大堀 哲(JMMA会長、長崎歴史文化博物館館長) (2) 挨拶 山口 孝(東京家政学院理事長) (3) 大会趣旨説明 高安礼士(JMMA副会長・大会実行委員長、千葉市科学館)
14:00	学会賞授与式【4階・1407教室】 受賞挨拶 亀井 修(独立行政法人国立科学博物館 産業技術史資料情報センター) 松本 栄寿(スミソニアン研究家・元横河電機) 湯浅万紀子(北海道大学総合博物館) 株式会社江ノ島マリンコーポレーション
14:20	特別講演【4階・1407教室】 「ミュージアムがおこす新しい風ー子供のためにできることー」 石戸奈々子(NPO法人 CANVAS理事長)
15:30	休憩
15:40	シンポジウム(指定討論)【4階・1407教室】 テーマ：『社会のためのミュージアムーミュージアムがおこす新しい風ー』 パネリスト：「人びとと社会をつなげるミュージアムの役割」 伊藤達矢(東京藝術大学美術学部) 「ルーヴル-DNP ミュージアムラボ活動紹介」 久永一郎(大日本印刷(株) C&I事業部) 「ロケ誘致によるフィールド・ミュージアム構想の実現」 土井義行(常総市役所産業労働部商工観光課) 特別講演講師 石戸奈々子(NPO法人 CANVAS理事長) 司会：田代英俊(JMMA理事、公益財団法人日本科学技術振興財団・科学技術館)
18:00	情報交換会【ローズホール】 懇親会挨拶 沖吉和祐(JMMA副会長、東京家政学院常務理事) 乾 杯 森賀盾雄(JMMA理事、愛媛大学)

● 第2日目(6月1日(日)／東京家政学院大学)

時 間	内 容
	会員研究発表(午前の部) 【4階・1407教室】
9:30	①地域運営方式を旨とする地方小規模館の新たな展開～明宝歴史民俗資料館の挑戦 嵯峨創平(岐阜県立森林文化アカデミー)
9:50	②ミュージアムとソーシャル・ネットワーキング 本間浩一(慶應義塾大学SDM研究所)
10:10	③インターネットを用いた、博物館および科学・社会への興味関与度に対する意識調査 庄中雅子、松尾美佳、小川義和(国立科学博物館)、鈴木和博(株式会社文化環境研究所)
10:30	④日本の動物園経営のパラダイム転換にかかる要因分析 佐渡友陽一(市民ZOOネットワーク)、若生謙二(大阪芸術大学)、石田戢(千葉市動物公園)
10:50	⑤児童・生徒の理科に対する意識や授業態度と科学技術館における展示等の教育・学習効果との相関について 田代英俊、高原章仁(公益財団法人日本科学技術振興財団・科学技術館)
11:10	⑥新学芸員養成課程に対応するユニバーシティ・ミュージアムの実態調査研究(1) 緒方泉(九州産業大学美術館)
11:30	⑦ミュージアムをつなぐ ～みえミュージアムセミナーがつくりだしたもの～ 河原孝(三重県生涯学習センター)
11:50	休憩
	会員研究発表(午後の部) 【4階・1407教室】
13:00	⑧佐田岬半島の「ふるさと遺産」活用によるフィールド・ミュージアム展開と地域再生 森賀盾雄(愛媛大学)、延藤裕之、岡本玲佳(愛媛大学農学研究科院生)
13:20	⑨展示する場からいのちを伝える場へ 山岡ヒロミ(NPO団体「かぐや媛」)
13:40	⑩《風神雷神図》から学ぶ3.11後のミュージアムの使命 ー石川県立美術館「俵屋宗達と琳派」展の事例から 村瀬博春(石川県立美術館)
14:00	⑪産業技術史資料情報を国民的資源として社会に資する博物館 「重要科学技術史資料(未来技術遺産)」を中心にして 亀井修(独立行政法人国立科学博物館 産業技術史資料情報センター)
14:20	⑫美術館教育の地域性にみる諸課題の考察 ー東北地区の実地調査を通じてー 渡邊祐子(東北大学大学院)
15:00	閉会式【4階・1407教室】 閉会挨拶 水嶋英治(JMMA副会長、筑波大学大学院図書館情報メディア系教授)

JMMA第19回大会 会長挨拶

大堀 哲（JMMA会長、長崎歴史文化博物館館長）

皆様こんにちは！今年もJMMA会員の皆様が一堂に会える日がやってきました。第19回を迎えた年大会に、このように全国各地から多数ご参加いただき大変うれしく思います。

また、3年連続で本大会の会場をご提供いただきました東京家政学院大学山口理事長先生はじめ、大学の皆様から感謝申し上げます。いつも大会が盛況裡に開催でき成果を挙げることができますのは、ひとえに東京家政学院大学の皆様のご尽力の賜でありまして、改めまして心から御礼申し上げる次第であります。

さて今日は5つのことを申し上げてみたいと思います。

第1に、今年度のテーマ「ミュージアムがおこす新しい風」との関連です。平成24年度から3年間の研究・実践活動のテーマを「社会のためのミュージアム」とし、24年度は「心に残る新たな表現」、25年度は「つながる仕組み」をそれぞれのサブテーマにしていまいりました。いずれもミュージアムが地域社会の人々の心に残るもの、個人や地域社会とのつながりをいかに強めていくかということでありまして、研究発表においてこれらのことに会員の皆様が大変真剣に取り組まれたことがうかがわれました。今年度のサブテーマは「ミュージアムがおこす新しい風」ですが、ミュージアム経営形態が多様化する中でこれからのミュージアムの経営を地域での展開に焦点化して1年間取り組んでいこうというものであります。

次に、ただ今申し上げましたように、近年の我が国における博物館は、公立博物館直営に加えて、国及び地方の独立行政法人、PFI、公立博物館への指定管理者制度導入など、経営形態の多様化が進行していることに關するものであります。どの経営形態であれ、博物館利用者にとって好ましいものでなければならぬわけですが、果たしてそれはどんな状況か、どういう効果、又は影響を及ぼしているのか、利用者サービスの低下を招いていることはないのか、さらには経営基盤の強化になっているのか、研究や教育活動の面からは継続性の問題などということが言えるのか、等々の議論が少なくないのではないかと思います。集客力、入館者数に偏重するあまり、研究や展示・教育の質はどう変わってきているのか、芸能界などで人気のある人の作品展を開催して集客に汲々としているのではないのか、この美術館の魂、ミッションはどこにいったのか、といった非難めいた市民の声はないのか、ミュージアムの経

営に起こしている新しい風とはどういうものか、といったことなどミュージアムの経営の問題を総括してみてもどうかということでもあります。このサブテーマに即してこの1年間、多様なミュージアムの経営形態のかかえる問題点を改めて整理し、研究してみてもいかがでしょうか。

第3にミュージアム・マネージメント事典の編集発行についてであります。

来年は本学会創立満20周年という記念の年を迎えます。会員皆様の熱心な活動が、我が国の全国規模の博物館学会の中核を担う存在になったのはいうまでもありませんが、まだまだ研究すべき課題は山積しております。ミュージアム・マネージメント学の体系化も大きな課題であります。しかし懸案のミュージアム・マネージメント事典編集が現実になり、20周年には刊行できる予定であります。高安副会長が事典編集実行委員長になり、委員長を中心にかなり精力的に作業を進めていただいたためであります。できるだけ多くの会員に執筆していただきたいという思いは変わりませんが、時間の問題もあり、とりあえず第1弾を刊行しようということになりました。刊行するに当たりましては、何かと皆様にもご協力をいただくことになると思いますのでよろしくお願いいたします。

第4に、JMMAの将来方向の重要な一つとしてかねてから取り組んでおります博物館の国際化、博物館関連学会等との連携の強化の件であります。

さきほどの事典にも反映されますが、本学会の将来目指す方向性の一つであり、JMMAの緊急課題としても地道に取り組んできました博物館の国際化、国際交流の推進についてであります。これまで水嶋副会長の国際的な人脈を生かしていただいてJMMAが我が国の博物館の国際交流に果たした実績は申し上げるまでもありません。勿論、このことはこれからさらに取り組むべき課題であり、十分な成果が上がっているとは考えておりません。しかし、これを推進するための人的、財政的体制が十分に整備されなければ進められない訳でもありません。ぜひ一步一步進めてまいりたいと思います。

とかく博物館の中にいる私たちは、いわゆるハコの中かで狭い思考や研究に陥りがちですが、学会も例外とはいえません。海外の学会関係者、研究者との交流を通じて情報交流、研究の交流を図る意味は極めて大きいものがあると思います。

さきほど韓国博物館学会の金会長とJMMAが覚書を取り交わしたところではありますが、できるだけ早く台湾の中華民国博物館学会と同様に進めたいと考えております。いずれ会報等で詳細はお知らせいたしますが、会員皆様の国際交流を学会としても積極的に奨励したいと思っております。

5番目に学会賞の件であります。

第1回の学会賞から数えますと、昨年の第14回まで42人、2団体が受賞されており、これからも沢山の会員の皆様に續いていただきたいと思います。

これまでは殆ど個人の受賞でありましたが、学会は個人会員のほか、法人会員として学会を物心両面から支えていただいている事実がございます。

この度、JMMA法人会員として学会発足以来ご支援いただいております江ノ島マリンコーポレーションに学会賞を授与させていただくことになりました。これは、ミュージアム経営の観点から学会員はもとより我が国のミュージアム関係者や研究者等にとって極めて学ぶところが大きく、まさにミュージアム・マネジメント学会賞に最も相応しいと判断したからであります。本学会副会長であり、江ノ島水族館館長をお勤めになっておられる堀 由紀子先生には本学会に対する多大なご支援を賜っていることに心から感謝申し上げたいと存じます。

いささか長くなってしまいましたが、この後の特別講演、シンポジウム、夜の情報交換会、明日の会員研究発表会等を通して、会員皆様の交流、つながりを強めていただき、実り多い2日間を創り上げていただきますよう、心からお願い申し上げます。

最後になりましたが、本大会のために長いこと準備をしていただいて参りました高安実行委員長はじめ、役員、事務局の皆様へ深く感謝申し上げます。改めまして東京家政学院の皆様へ厚く御礼申し上げ、開会のごあいさつに代えさせていただきます。皆様のご活躍をお祈りいたします。本日は誠に有難うございました。

JMMA第19回大会開催の趣旨

高安 礼士

(JMMA副会長・大会実行委員長、千葉市科学館)

1. はじめに

本日は日本ミュージアム・マネジメント学会第19回大会にお集まりいただきましてありがとうございます。JMMAの大会は、地方会員の皆様の負担軽減、あるいは支部活動の活性化を図る観点から、第16回大会は福岡市で開催し、その後隔年で東京以外の地域で開催することとしております。今年度は、来年の20周年記念大会を見据えて東京開催となり、新しくなった東京家政学院大学の会場をお借りして開催することとなりました。大学関係の皆様と準備に当たられました皆様に、改めてお礼申し上げます。

第19回大会のテーマは、3年間のテーマである「社会のためのミュージアム」の3年目として「-ミュージアムがお

こす新しい風-」といたしました。JMMAにおけるこれまでの年間活動テーマは、JMMAの発足した平成8年度の第1回大会「ミュージアムがつくる新しい文化」に始まり、年ごとに活動テーマを掲げ、また平成12年度からは3年度ごとに学会の活動テーマを考えることとしてきました。平成24年度からの3年間の学会活動の主テーマを「社会のためのミュージアム」とし、今年度はそれらの具現化するものとして、既に新たな動きとして感じられているものを「新しい風」として捉え、サブテーマとしています。今後の一年間を、時代の風を認識した各研究部会や支部の活動を計画していただければ幸いです。

また、JMMA発足20周年を記念して「ミュージアム・マネジメント事典」の発行に取り組んでいることでもありますので、そのことにも関連した協議会も計画しておりますので、是非ご参加下さるようお願いいたします。

2. 主旨

世界的な政治や経済の不安定さが増し、我が国が東日本大震災後の経済・社会・行政制度の再構築を目指している中、ミュージアムには社会のために何ができるか、また新たな機能として何をなすべきかをより明確にして訴えていくことが求められています。こうした状況の下で本学会は、平成24年度からの3年間の活動テーマを「社会のためのミュージアム」とし、24年度は「心に残る新たな表現」、25年度は「つながる仕組み」を年間テーマとし、最近生まれたツイッターやフェイスブックなどの新たな機能や方法を用いて、ミュージアムをどのように社会につなげて活性化し、新たな価値を創造していくかを取り上げ、「つながる仕組み」をサブテーマとして、個人や社会とのつながり方について取り組んできました。

平成26年度は、今日の社会状況に対応する「ミュージアム・マネジメントの新しい在り方」を考えるためにサブテーマを「ミュージアムがおこす新しい風」とし、今起こりつつあるミュージアムとそれに関連する分野での新しい動きを捉え、今後の方向を考えることとしました。特に本大会では、全国各地のミュージアムの利用者の中で目立つ「幼児」に注目し、「こどもを対象としたワークショップ」に取り組むCANVASの石戸理事長に基調講演をお願いし、さらに各分野で新しい動きを展開している東京藝術大学の伊藤達矢氏、大日本印刷(株)C&I事業部の久永一郎氏、常総市役所産業労働部商工観光課の土井義行氏の皆様とミュージアムにおける今後の方向性について御議論していただくこととしました。

また、JMMAでは創立20周年を記念して「ミュージアム・マネジメント事典」の発行を計画しております。現在、大項目、中項目、小項目の執筆担当やその執筆要領等について議論しています。項目の選定や執筆方法等について検討するため、大会2日目の午後に拡大編集委員会を開催

いたします。本大会のフォーラムや研究発表の内容も反映したいと考えておりますので、ご興味・関心のある方や執筆予定者は是非ご参加下さい。本事典は、来年の20回大会開催日までに出版することを予定しています。

なお、本大会は、(財)日本博物館協会が実施している「国際博物館の日」(5月18日を中心に1ヶ月間開催)の事業の一環として開催します。

JMMA第19回大会の役割分担

実行委員長	高安副会長
副実行委員長	田代理事、小川理事
○総会及び開会式担当	高橋副会長、土井理事、 原幹事、小笠原幹事
総会・大会司会	齊藤理事
記念講演担当	高安副会長
○学会賞表彰担当	高橋副会長、齊藤理事
◎指定討論(原稿等)	齊藤理事、高安副会長
○研究発表会担当	田代理事、高橋副会長、 亀井幹事、高尾幹事
部会・支部会報告、閉会式担当	高橋副会長、齊藤理事
懇親会担当	齊藤理事(司会)、 高橋(信)理事
アフタヌーンミュージアム担当	齊藤理事、塚原理事
総務担当(資料・受付含む)	高橋副会長、齊藤理事、中野幹事
経理担当	小笠原幹事、原幹事
広報担当	星合理事、齊藤理事、高尾幹事
開会挨拶、学会表彰	大堀会長
懇親会挨拶	堀副会長
乾杯	沖吉副会長
閉会挨拶	高橋副会長

『ミュージアム・マネージメント事典』【概要】

書名 「ミュージアム・マネージメント事典」
編集 日本ミュージアム・マネージメント学会事典編集委員会編
総頁 400頁程度(原稿用紙換算で1000枚)

構成 4部

第Ⅰ部: ミュージアム・マネージメントの基礎(大項目)
第Ⅱ部: ミュージアム・マネージメントの実例(代表的事例集)
第Ⅲ部: 重要キーワード解説集(小項目)
第Ⅳ部: ミュージアム・マネージメント関連統計データ

JMMAにおける これまでの19年間活動テーマ

- ・平成8年度…「ミュージアムがつくる新しい文化」
- ・平成9年度…「新しい時代をつくるミュージアムの可能性」
- ・平成10年度…「時代の転換とミュージアム」
- ・平成11年度…「地域社会とミュージアム」
- ・平成12～14年度…「リレーションシップ
ー地域との連携ー」
- ・平成15～17年度…「ミュージアム・コミュニケーション」
- ・平成18～20年度…「ミュージアム・マネージメントの
再構築」
- ・平成21～23年度…「ミュージアム・リテラシー」
- ・平成24～26年度…「社会のためのミュージアム」

平成24～26年度のテーマ ー社会のためのミュージアムー

- ・国際社会や地域の中の博物館の意義は何か
- ・震災後の日本において、地域のために何をすべきか
- ・時代の変化をどう読むか
- 社会的な文脈から考える博物館の価値
- 新たな表現: 今日の社会が求める表現
- つながる仕組み: 個人的文脈に基づく方法
- ミュージアムがおこす新しい風: 学びを社会で生かす

『ミュージアム・マネージメント事典』企画

【出版の目的】

- ・2015年のJMMA創立20周年を記念
- ・本学会の蓄積してきた学問的知見を総括
- ・ミュージアム・マネージメントの全体像を示す
- ・本事典は「マネージメント」に限定する

『執筆要領』【JMMA事典編集委員会】

- ☐原稿締切
=2014(平成26)年7月30日(第一次締切り:大項目)
9月10日(第二次締切り:中項目・小項目)
- ☐刊行予定=2015(平成27)年5月
- ☐著者校正は初校・再校の1回を原則
- ☐原稿送付先=〒136-0082東京都江東区新木場2-2-1
電話・ファックス 03-3521-2932
E-mail/kanri@jmma-net.jp
日本ミュージアム・マネージメント学会事務局 津久井真美

〈特別講演〉

ミュージアムがおこす新しい風 —子供のためにできること—

石戸 奈々子 (NPO法人 CANVAS理事長)

本大会の基調講演は、NPO法人CANVAS（キャンバス）の理事長・石戸奈々子氏を招待し、氏が長年にわたって取り組んでこられた子どもたちを対象としたワークショップ、イベント、セミナー等の事業活動とその歴史的背景、さらには持続的成長を可能にした産官学等の連携の仕組みづくり等を報告していただいた。

NPO法人CANVASは、「こども向け参加型創造・表現活動の全国普及・国際交流を推進するNPO」を目的に、2002年11月に設立された。「こどものための創造の場と表現の場を提供し、豊かな発想を養う土壌の構築」というコンセプトにそって、CANVASは国内外の団体・人々との間に新たなネットワークを形成し、そのネットワークから発案、協働が一貫して行われる世界規模の活動はよく知られている。最近では、Googleとの共同によるプログラミング学習普及プロジェクト「PEG」を立ち上げ、Google会長エリック・シュミット氏と石戸氏との共同記者会見を契機に今、全国40校の小中高等学校、35の教育関連団体や企業、さらには4つの自治体と連携し、今年1年で2万5千人の子どもたちを対象にプログラミング学習を届ける取り組みが注目されている。

多様化している博物館事業の中でもワークショップ活動は、博物館が取り組むべき重要課題として注目されており、今回の基調講演は、ワークショップを展開している博物館担当者をはじめ、学校教育関係者、アーティストら多くの方々に有益な成果をもたらしたと思われる。

以下に、基調講演のあらましを記す。

21歳のとき、チルドレンズミュージアムと初めて出会った。それはアメリカのボストンでのことで、有名な「ボストン茶会事件」の舞台となった運河沿いの倉庫を活用したレンガ造りの「ボストンチルドレンズミュージアム」だった。

色鮮やかな展示構成物の中をもぐったり、よじ上ったり、子どもたちは楽しそうに自由にかけずり回っていて、衝撃を受けた。静かに! 走らないで! 触らないで! というミュージアムの堅苦しいイメージとは程遠いシーンがそこには展開されていた。

実際に全身で触り、五感をフル稼働させ感じる展示物を実際にやってみて、つくってみる参加型のワークショップ。好奇心の赴くままに、夢中で遊び、学んでいる子供たち。

「遊びこそ、論理的思考、コミュニケーション力、課題解決力、協働する力といった、これからの社会を生きて行く

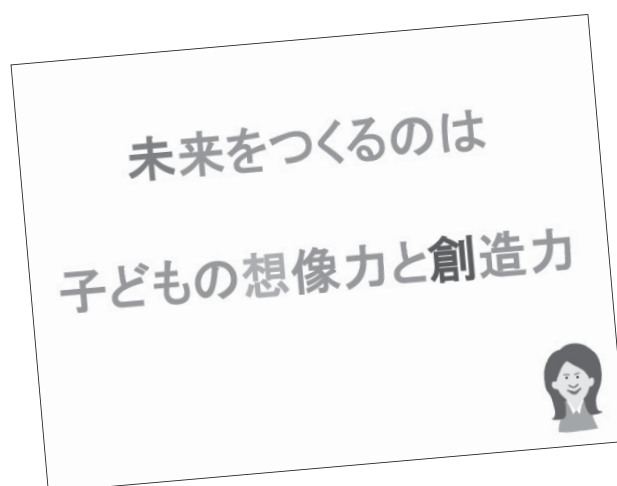
上で必要なスキルの開発につながる。ボストンチルドレンズミュージアムは、子どもたちが21世紀型スキルを遊びながら育める場所だ。」と言われていることが、実感できた。

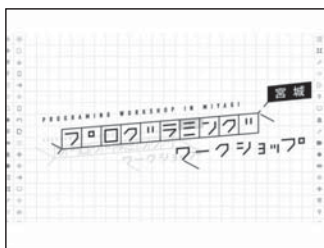
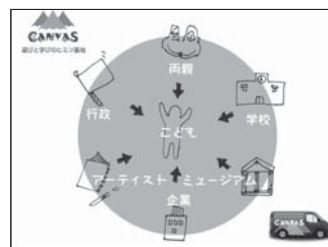
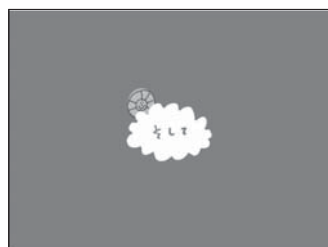
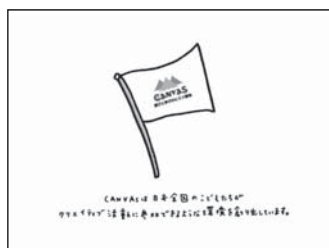
それから世界十数カ国のチルドレンズミュージアムを見て回りつつ、日本で子どもたちの創造的な学びの場を産官学連携で推進するNPO法人としてCANVASを設立した。

子どもたちの創作・表現活動について、国内・海外の実態を調査・分析するとともに、これらに基づきアニメ作り、音楽作り、ロボット作りなどのワークショップを開発したり、全国各地で行われることもたちのクリエイティブ活動を支援したりするというのが活動内容である。子どもたちのクリエイティブ能力を育てるプラットフォームとして機能することを目指している。これまでに約30万人の子どもたちにワークショップを提供しており、毎年1回定期開催している子供たちを対象とした全国のワークショップを一堂に会した博覧会イベント「ワークショップコレクション」には100のワークショップが参加し、2日で10万人の来場で賑わっている。このような活動をCANVASは産学官のトライアングルの協調によって進めている。各地でワークショップの活動をしているコミュニケーター、児童館・科学館・博物館関係者、学校・教育関係者、大学等の研究者、企業、行政担当者らとの連携を密にした共同体として活動している。

この基調講演では、これまでの実践例を紹介しつつ、CANVASが大事にしている学びの視点やミュージアムとの関わりについて報告する。

(以下、当日のスライドを紹介。参考文献は「子どもの創造力スイッチ! 遊びと学びのひみつ基地CANVASの実践」/JMMA事務局: 高橋信裕記)







かんじる ➡ かんがえる

↑
つたえる ← つくる

WSで大事にしている10の視点

1. 学び方を学ぶ
2. 楽しく学ぶ
3. 本物と触れる
4. 協働する
5. 教え合い学び合う

WSで大事にしている10の視点

6. 創造する
7. 発表する
8. プロセスを楽しむ
9. 答えはない
10. 社会とつながる

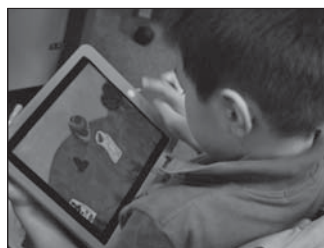
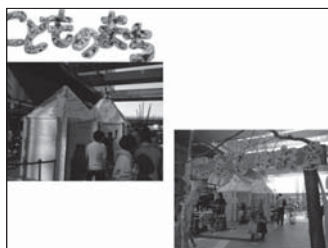
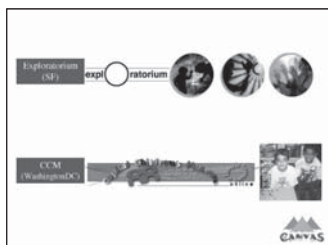
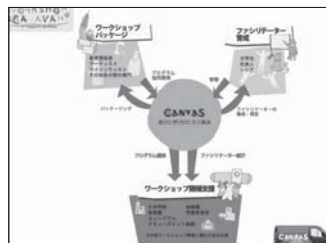
ファシリテーションの視点

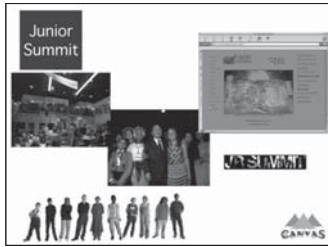
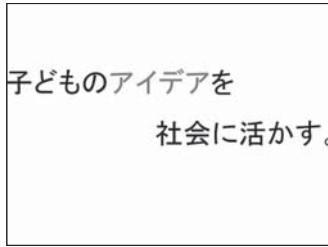
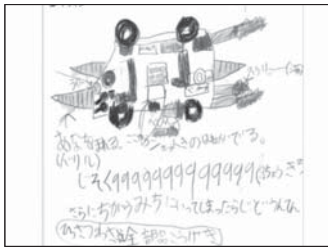
- ・子どもの興味と主体性を引き出す
- ・目標を見つける手伝いをする
- ・「考えのプロセス」の振り返る
- ・同じ目線の高さに合わせる
- ・「答え」ではなく「きっかけ」を提供する

ファシリテーションの視点

- ・子どものやりたいことをまず受け入れる
- ・効果的な問いかけをする
- ・創作意欲がわきやすい場をつくる
- ・時間の感覚を意識する
- ・自分も楽しむ

調査・研究
開発・実践
普及・啓発





Y-Vision(ヤマダ電機)
全国のヤマダ電機33店舗 テレビ売り場



メディキヤスター(病院)
全国の医療機関 400施設



東京Media(ローソン)
都内のローソン304店舗



ほんやチャンネル(書店)
関東地方の主要書店39店舗

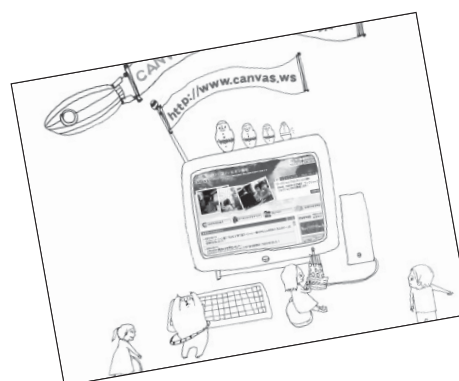
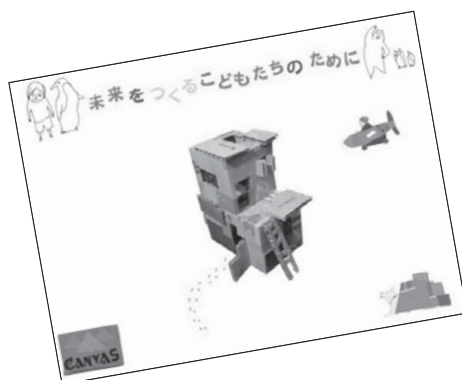


レストランチャンネル(羽田空港)
羽田空港第1ターミナル、第2ターミナル内の女子トイレ65箇所355台



新未来学
Future Lab

imagine
&
realize



〈指定討論〉

社会のためのミュージアム ーミュージアムがおこす新しい風ー パネルディスカッションの趣旨

田代 英俊

(JMMA 理事、公益財団法人日本科学技術振興財団・科学技術館)

【パネルディスカッションの背景】

世界的な政治や経済の不安定さが増す一方、東日本大震災後の経済・社会・行政制度の再構築を国が目指している中、ミュージアムは社会のために何ができるのか、また新たな機能として何をなすべきかをより明確にし、社会に対してアピール・実践していくことが今、博物館に求められている。

こうした状況の下で本学会は、平成24年度からの3年間の活動テーマを「社会のためのミュージアム」とした。またサブテーマとして、平成24年度は「心に残る新たな表現」、平成25年度は「つながる仕組み」をテーマとし、個人と社会の関わり方について、博物館を軸として何ができるかを模索した。

そして本年度は、従来にない博物館活動に着眼し、「ミュージアムがおこす新しい風」とし今後の方向を考えることとした。

【博物館が置かれている社会状況】

まず、パネルディスカッションの始めに博物館が置かれている社会状況について確認した。

文部科学省が3年に一度実施している「社会教育調査」の結果によると、博物館の館数（博物館・博物館類似施設）は、従来増加していたが平成23年度の調査でついに減少に転じている。平成20年の調査では5775館であったが、平成23年の調査では5747館となった。館数の減少と連動するように、従来増加傾向にあった来館者数も、平成19年度間で2億7981万人であったが、平成22年度間では2億7665万人と減少している。

博物館施設を館種別館数・来館者数で見ると図1の通りである。歴史博物館が6割を占めており、入館者数も一番多いことがわかる。しかし視点を变えて1館あたりの平均入館者数で見ると、図2の通り動物園が34万5千人、水族館が32万7千人であるのに対し、歴史博物館は館種別で最も少ない2万4千人である。もちろん歴史博物館は館数が多いことから単館では来館者数を集めづらいとか、動物園、水族館は館数が少ないからこそ来館者を集めることができるともとれる。しかし入館料その他のファクターを考えると、館種別に見た博物館数と来館者の博物館に対するニーズにズレがあると考えられる。

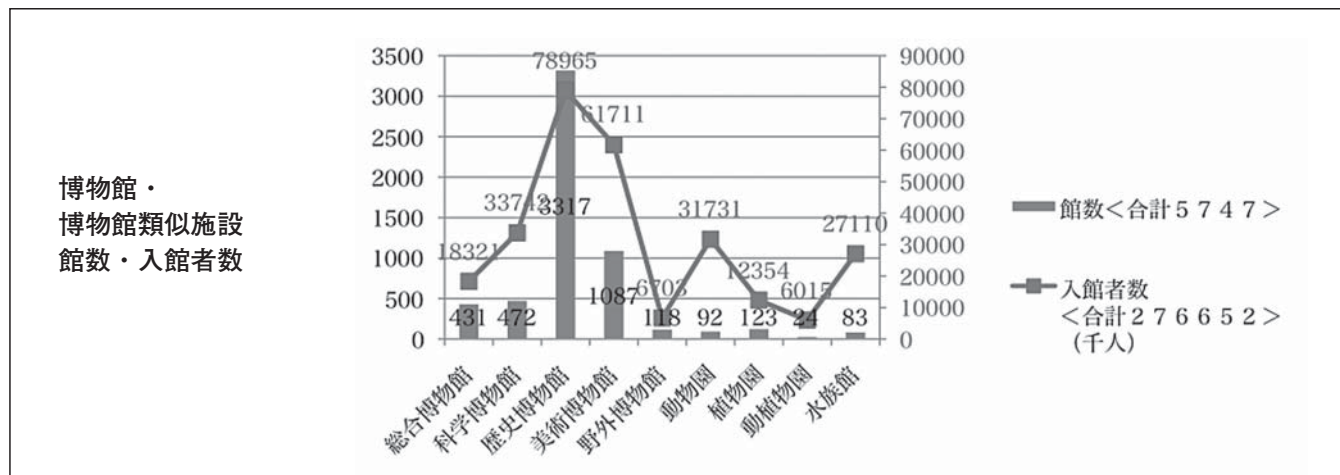


図1

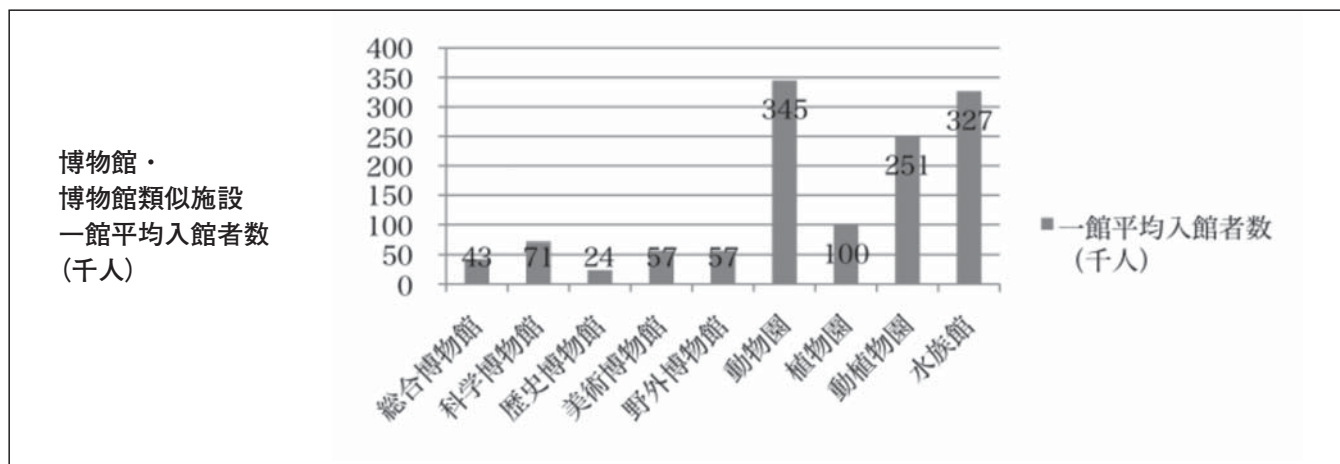


図2

次に博物館活動の実施状況について、文部科学省が実施した「H23生涯学習センター・社会教育施設の状況及び課題分析等に関する調査報告書」から「現代的課題に対する取組状況」を図3に示す。博物館の館種別館数では歴史系博物館が多いこと、また学習指導要領の中でも博物館と学校教育との連携があげられていること、なにより生涯学習施設であることから「地域・郷土理解」「教育支援」の実施率が高いことがわかる。一方で国として科学技術立国を標榜しているにも関わらず「科学技術理解増進」が低いこと、東日本大震災後、災害・防災に対する市民の意識が高まっているにも関わらず、博物館活動として実施されていないこと等、博物館活動が社会ニーズを捉えきれていない部分があることが浮き彫りにされている。

以上の点を踏まえ、話題提供者には新たな博物館活動の特色をご紹介いただいた。

【話題提供とパネルディスカッション】

話題提供者及び話題提供のテーマは以下の通りである。

- 1) 伊藤達矢氏（東京藝術大学）
『ミュージアムを介して社会を変える 「とびらプロジェクト」と「Museum Start あいうえの」』
- 2) 久永一郎氏（大日本印刷(株)C&I事業部）
『ルーヴル-DNP ミュージアムラボ活動紹介』
- 3) 土井義行氏（常総市役所産業労働部商工観光課）
『ロケ誘致によるフィールドミュージアム構想の実現 ～私的学芸員活動報告～』

話題提供者の3氏に加え、基調講演を行っていただいた石戸奈々子氏（NPO法人CANVAS）も入っていただき、さらに会場を交えて、話題提供いただいた内容をベースに以下の3点を論点として議論を深めた。

- 1) 生涯学習施設として、博物館の存在意義を誰に対してアピールするか。来館者にどのようなメリットを感じてもらえるか。
- 2) 様々な機関と博物館が連携することで、新たな学習、知の創造をできないか。
- 3) 集客施設、生涯学習施設、両者の観点から地域社会に対しどのように貢献するか。

話題提供の詳細は、話題提供者からの報告をご覧ください。

結論を先取りするがパネルディスカッションの総括としては、2019年を目標に世界博物館大会を招致すべく日本が立候補していること、2020年夏季オリンピックが日本で開催されることに連動して文化活動等に追い風が吹こうとしていることから、このチャンスを捉え、それぞれの博物館はもとより、JMMAも含め博物館界全体で博物館の存在意義に社会に知らしめる新たな活動を立案し、実施して行こうとの意識が醸成された。

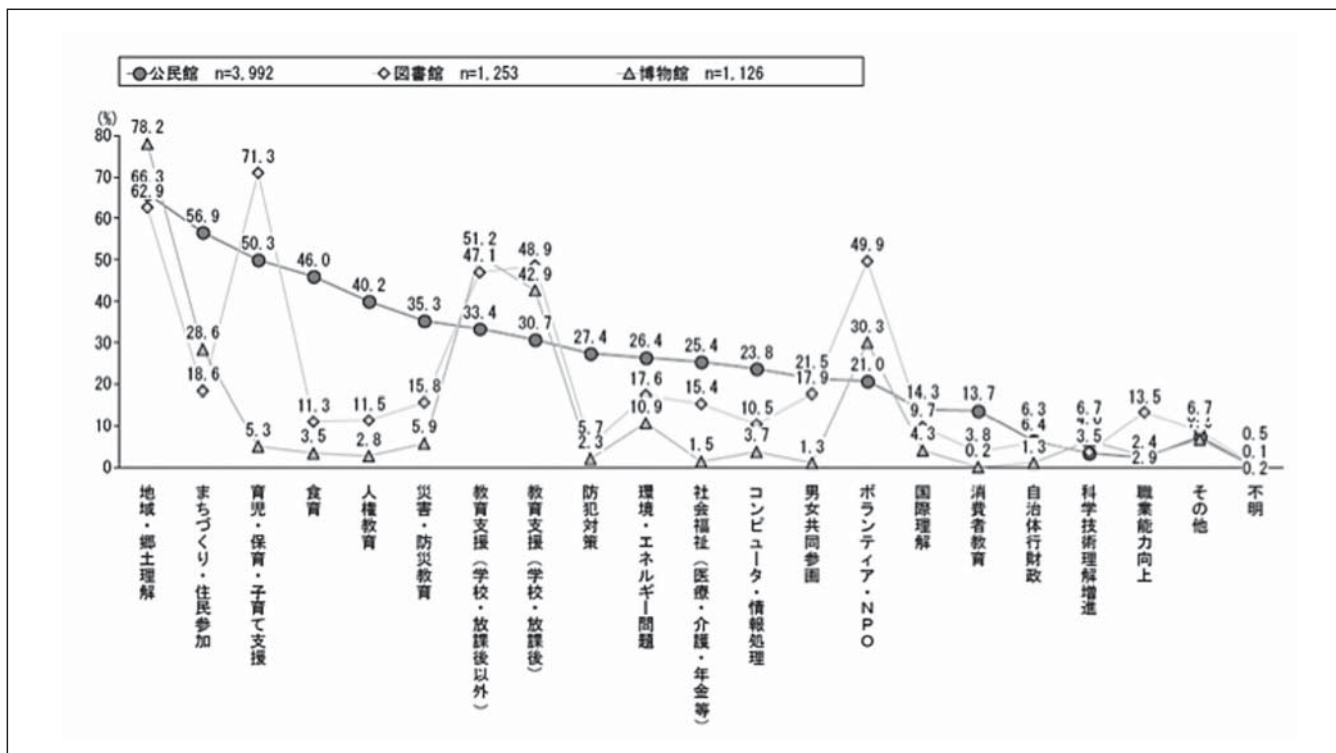


図3

(指定討論)

人びとと社会をつなげる ミュージアムの役割

～東京都美術館×東京藝術大学「とびらプロジェクト」と
「Museum Start あいうえの」の取組み

伊藤 達矢 (東京藝術大学美術学部 特任助教)

■東京都美術館と東京藝術大学が連携する意味

昨今、人口の減少や経済的な問題を背景に、「豊かさ」とは何かが問われている。「成長・拡大」から「成熟」へと言われる現代社会に於いて、人々が安心して暮らせる環境は、もはや経済的発展にのみ求めることはできない。むしろ、貨幣価値では計ることのできない、人々のつながりこそが必要とされている。

ここでは、そうした状況を踏まえ、東京藝術大学（以下、藝大）と東京都美術館（以下、都美）が連携して推進している、「とびらプロジェクト」と「Museum Start あいうえの」の二つの取り組みを紹介しながら、「人びとと社会をつなげるミュージアムの役割」について進めたい。

まず、藝大と都美が連携することとなったきっかけは、平成24年度の東京都美術館リニューアル・オープンにある。約100億円をかけて大規模な改修工事が行なわれたことに伴って、都美のミッションも新しくなった。このミッションが、藝大と都美の連携の背骨となっている。

「東京都美術館はアートの入り口となることを目指します。展覧会を鑑賞する、子どもたちが訪れる、芸術家の卵が初めて出品する、障害のある人も何のためらいもなく来館できる美術館となります。訪れた人が新しい価値観に触れ、自己を見つめ、世界とのきずなが深まる創造と共生の場、アート・コミュニ

ティを築き、生きる糧としてのアートに出会える場とします。これらを実現することで、東京都美術館が人々の心の豊かさのよりどころとなるようにします。」

この理想を実現するためには、アートの専門家だけではなく、美術館に訪れる様々な人々と共に、美術館という施設自体が持つ意味合いを、一から捉え直すことが求められた。そして、こうした既存の常識には捕われないことのできる構造を、美術館の内部に組み立てることこそが、本質的な都美のリニューアルにつながると考えられた。そこで新しい都美に設置されたのが、アート・コミュニケーション事業である。この事業は、美術館と社会との対話づくりに取り組むことから、美術館の存在を社会によりよく機能させ、また社会の有り様から、美術館の役割を捉え直して行くことを目指している。このアート・コミュニケーション事業が窓口となり、都美は敷地が隣接する藝大に対して連携を提案し、異なった組織が協同することで、「ゼロからの対話」が生まれ、新しい価値が見いだされることに期待をかけた。

これに対して藝大も、この都美のミッションに共感を示した。藝大は、これまで多くのアーティストや研究者を排出してきた歴史から、アートには社会を変える力があることを実感している。そして、社会の中にある既存の価値観に、別の物差しとして差し出せるものこそアートであると考え、また、そうした物差しを使って、社会の形をクリエイティブに引き直せる人材を、これからも輩出したいと願っている。このことから、美術館というより社会に開かれた施設との連携は、藝大にとっても非常に意義のある事業なのである。特にアートの専門家だけではなく、美術館に訪れる様々な人々と共に、既存の常識に捕われない「ゼロからの対話」を行なうことは、これまでに無い社会的価値を築きあげるチャンスと捉え、藝



大は都美と目的を共にし、「とびらプロジェクト」をスタートさせた。ここで簡単にとびらプロジェクトの概要を紹介する。

「とびらプロジェクトとは、東京都美術館と東京藝術大学が連携して行っているアートを介してコミュニティを育む事業です。毎年、広く一般からアートコミュニケーター（愛称とびラー）を募集しています。とびラーは学芸員や大学の教員、そして第一線で活躍中の専門家を中心としたプロジェクトチームとともに美術館を拠点に活動をしています。人と作品、人と人、人と場所をつなぎ、美術館に集まる多種多様な人々とのコミュニケーションを大切にし、そこから生まれる新しい価値を社会に届けていくプロジェクトです。」

■とびらプロジェクトの目指すソーシャル・インクルージョン（社会的包摂）

現在とびらプロジェクトをはじめて3年目になった。とびラーはボランティアな活動であり、参加されている方々は、主婦、会社員、教員、デザイナー、退職後の方、学生と様々で、人数も総勢150名となっている（平成26年度現在）。募集は18歳以上を対象とし、20～40代までの方が全体の約70パーセントを占める比較的若いチームである。

とびラーの活動は主に、学校やクラス単位で展覧会に訪れた子供たちの鑑賞のサポートや、都美の建築物としての魅力を紹介するオリジナル建築ツアーのガイド、更には障害のある方のための特別鑑賞会の運営などがある。とびラーはこうした実践の経験と、基礎講座・実践講座という段階的な2つのアート・コミュニケーション講座で学ぶことにより、アート・コミュニケーターとしての役割について理解を深めていくことができる。またそれ以外にも、とびラーからの発案によって生まれる新しいプロジェクトが沢山あり、我々はその発案するラボを「とびラボ」と呼んでいる。とびラボは、誰か1人のとびラーのアイデアをきっかけに「この指とまれ」で小さなチームをつくることから始まる。そして、集まったメンバー全員でできることを丁寧に考え準備を重ね、学芸員や大学の教員と相談をしながらそのアイデアを実現させてゆく仕組みである。例えば「マウリッツハイス美術館」展が開催された時には、来館者がフェルメールの「真珠の耳飾りの少女」に扮して記念撮影をするプロジェクトが行われ、描かれたモデルのポーズを実際にとることは難しいことを来館者と共有した。更に毎回の特別展では、その展覧会の内容に沿ったオリジナルの紙芝居を上演し、子供たちへ向けた展覧会への導入をするなど、その活動はまさに多彩である。その他、同時進行で幾つものプロジェクトが立ち上がり、とびラーの自主的な関わりによって進められている。ただ、とびラボはその目的が達成されると解散する約束になっており、また違ったアイデアや目的を実現したい場合は、



価値や時間を共有できる新たなとびラボを再結成することになる。昨年、とびラボの活動は、様々なプロジェクトの実施日と、事前のミーティングから実施の振り返りまで合わせると年間220回も行われた。この小さなチームの結成と解散の繰り返しは、とびラー同士の対話の機会を豊かなものになっている。さらに年齢や職業や経験が異なるとびラーたちが協働する上で、集う場所が美術館という非日常的な空間だということはとても重要な要素となっている。美術館というクリエイティブな場の力が、自分たちの日常の中にある常識や思い込みを一旦治めさせ、ゼロから他者の価値や声に耳を傾けることのできるオープンマインドをつくりあげている。だからこそ、多様な人々同士が、アイデアを出し合い活動を共にすることから、異なった価値を共有する経験が育まれるのだと感じている。

この様にとびラーたちの存在を、私たちは、いわゆる美術館ボランティアとは認識してはいない。美術館をサポートする者ではなく、学芸員や大学の教員とともに、美術館という社会的リソースと一緒に考え、一緒に作ってゆく、同じフィールドに立つプレーヤーだと捉えている。そして、非日常の美術館をプラットフォームとしたとびラーたちの活動には、社会的な期待が込められている。それは、人々がアートを介して、異なった価値を共有することや、多様な経験や考え方を育むこと自体が、貨幣価値では換算できない社会的財産になり得るということである。また、そうした経験を活かしながら、それぞれの生活圏に帰ってからも、日常の中に孤立散在する人々を、緩やかにつないでくれることを期待している。そうした行いこそが、高齢者や障害者などの社会的弱者であっても、社会の中で孤立することなく、誰もが社会に参加できる機会が担保されているソーシャル・インクルージョン（社会的包摂）を成し得ると考えているからである。つまり、とびラーの活動は美術館という非日常の場を活かしながら、日常の社会を緩やかにつなぎ直そうとする試みでもあるのです。そしてその緩やかなネットワークづくりは、ミュージアム同士の連携にも及び、平成25年度からは、上



野公園に集まる9つのミュージアムを連携させた「Museum Startあいうえの」がはじまった。

■子供たちのミュージアム・デビューを応援する 「Museum Startあいうえの」

この「Museum Start“あい”うえの」には、上野で「会う」、「愛」する上野という意味をかけた。とびラーたちがつなぎ手となり、18歳以下の子供たちを対象に幾つものプログラムが行なわれている。ここでは、具体的な事例を2つ紹介する。まず1つは「放課後のミュージアム」（隔週の水曜日に開催）というプログラムである。子供たちの日常である放課後に、ミュージアムを居場所として提案しようという試みである。例えば、都美で金箔が施された群鶴図屏風を子供たちととびラーとで対話しながら鑑賞する。その後2班に分かれ、片方は隣の上野動物園に、屏風に描かれていた本物の真鶴を観察しに出かける。本物と比べることで、動物の姿がデザインされ描かれている事がリアリティーをもって確認できるなど、いろいろな発見が起こる。またもう一つの班は、東京国立博物館へ金があしらわれている文化財を探しに行く。最後にもう一度都美に戻り、それぞれの班が発見したことを、写真やメモを全員で見ながら共有する時間を設ける。歩いてまわれる範囲に動物園や博物館や図書館など、大きな文化施設が集積する上野公園の特徴を活かし、コミュニケーションによる新しい価値の創出と、既存の価値の編み直しを目指した活動が展開されている。

そして、もう一つは、障害のある子供もいない子供も同じ環境で学び合える全6回のプログラム「のびのびゆったりワークショップ」である。自閉症などの障害を持つ子供は、美術館の静寂な空間が苦手な場合もある。そこで、このワークショップでは、子供ととびラーがペアになって、少しずつ信頼関係を築きながら不安を取り除き、造形と鑑賞の体験を通して子供たちのミュージアム・デビューを応援している。また、別室ではワークショップに平行して、保護者向けのプロ

グラムが行なわれ、障害を持つ子の保護者と、持たない子の保護者が、お茶を飲みながら、緩やかに子育てやアートについて話ができる場が設けられている。多様な人々が交わり合い、アートを介することで、様々なギャップや領域を超え、つながり合うきっかけをつくる美術館の可能性について考え、取り組んでいる。



■肝臓に例える社会装置としてのミュージアムの役割

藝大と都美は、ささやかながらも、ミュージアム（非日常）を介して、社会（日常）に新しい価値を届けようと「とびらプロジェクト」や「Museum Startあいうえの」を実施している。人々の営みの中に生まれ、ミュージアムに蓄えられた様々な文化財や、それに内在する記憶、思想、価値は、ミュージアムに集まる人々によって、再構築され、そしてまた新たな価値として、再び社会へと届けられていく。そうした循環の作用を担うミュージアムという場を敢えて例えるならば、私たちの体内にある肝臓の様な役割を果たしていると言えるのではないだろうか。肝臓は、栄養素の貯蔵庫になり、食物から取り入れた栄養素を分解、代謝したり、有害物質を処理したりする臓器である。そしてエネルギーを循環させる役割を果たしている。ここでミュージアムを体の一部に例えた意図は、ミュージアムは、ただ非日常的な芸術を内包して存在するのではなく、人々の営みの中で基盤的役割を担って機能する社会装置の一つであると、これまでの活動を通して改めて実感しているからである。現代社会において、ミュージアムという非日常は、日常にエネルギーを循環させ、生命力を与える重要な役割を担っている。そしてそれは、人々のコミュニケーションがあってこそ健全に機能すると考え、藝大と都美はこれからも、人々のつながりを大切にしたいと考える。

〈指定討論〉

ルーヴル-DNP
ミュージアムラボ活動紹介

久永 一郎（大日本印刷（株）C & I 事業部）

JMMA第19回大会のテーマである「社会のためのミュージアム -ミュージアムがおこす新しい風-」で発表の機会をいただき、ありがとうございました。当日のプレゼンテーションで伝えきれなかったことを補足しつつルーヴル-DNPミュージアムラボ（以下LDML）を紹介します。

1. 概要

LDMLはルーヴル美術館と大日本印刷株式会社（以下DNP）が取り組んでいる美術鑑賞を革新するための共同プロジェクトです。美術鑑賞は「ただ作品に視線を向けるというだけではなく、見る、知る、感じる、考えるというプロセスを通して、想像力と感受性を刺激し、見る人にさまざまな発見や感動をもたらす、新しい視点をひらくこと」だと考え、2006年から2010年を第1期「まったく新しい美術体験」、2011年から2013年を第2期「見方が変わる、見え方が変わる」というコンセプトで活動してきました。DNP五反田ビルにプロジェクト専用スペースを設け、ルーヴル美術館の作品を実際に輸送・展示しマルチメディアを使って様々な切り口から作品を鑑賞する方法を提案してきました。これまでに10回の展覧会で約100のマルチメディアプログラムを開発し、その一部はパリのルーヴル美術館の常設展示室に導入されています。

ルーヴル美術館から作品と共に同館が抱える課題が提示され、DNPがマルチメディアを提案し、共同でコンテンツを開発していきます。様々な課題がありますが、大きく2つの分野があります。

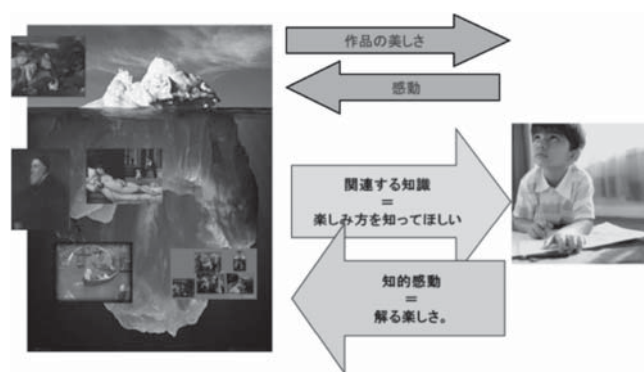
- A. 急増し多様化する来館者への対応（混雑緩和や多言語対応）
- B. 美術鑑賞への興味喚起（興味の持たせ方や説明手法）
今回は課題B. 美術鑑賞への興味喚起（興味の持たせ方や説明手法）にかかわる部分を中心にLDMLの取り組みを解説します。

2. 課題

「古典美術を楽しむためにはある程度の知識と努力が必要。ただ、事前の準備（努力）を来館者に、ましてや旅行者に求めるのは難しい。」

上記はルーヴル美術館の学芸員の言葉です。従来（現在）の美術館ではホワイトキューブ（展示室）に作品を整

然と展示し、作品名、年代、作者、素材を記載したキャプションがあるだけ（無題なんてことも、）、どのように鑑賞するかは鑑賞者に委ねるというのが一般的です。自由といえば自由ですが、鑑賞スキルを持ち合わせていない来館者にとっては不親切で展示物とどう関わりを持ったらいいのか解らず戸惑ってしまう。現代美術であれば、ただ感じるだけでよいと割り切ることもできるかもしれませんが、ルーヴルに展示されている古典美術は美術史上の表現や画法の重要性や来歴、画題にまつわる社会背景や宗教的教訓など作品が背負っている物語を読み解くことに鑑賞の楽しみがあります。しかし、その楽しみ方を知り実践できるのはごく限られた人々で若者や異文化からの旅行者にはかなり難しいということです。



ルーヴル美術館は教育普及部門もおそらく世界最大で、ギャラリートツアー、ワークショップを数多く実施し、「ルーヴルの馬」や「愛」などテーマ別に回れるパンフレットを用意していますが、受け入れ人数や情報量には限度があります。また、音声ガイドを導入していますが個人端末であるため家族やグループの来館者がそれぞれ別の解説を思い思いに聞くことになりルーヴル美術館に来た体験が共有されないという問題を持っていました。ルーヴル美術館前館長アンリ・ロワレット氏は21世紀もルーヴル美術館が世界の美術館のリーダーであり続けるためにはマルチメディアを使いこなさなければならないと考え、かねてから交流のあったDNPに相談をいただきました。DNPではメセナ活動として美術館を支援することはもちろんもっとも難しいコミュニケーション課題を実証実験しながら解決できるチャンスととらえプロジェクトをスタートさせることになりました。

3. マルチメディア開発のコンセプト

プロジェクト開始時にLDMLで開発するマルチメディアの役割について整理しました。

- ・実物の作品鑑賞の妨げになってはいけない。
 - ・作品近くのマルチメディアは「作品を見たくなる」情報を編集する。
 - ・展示室のその場で必要とされる情報を編集する。
- インターネットでできることはインターネットに、紙が適しているものは紙に任せる。

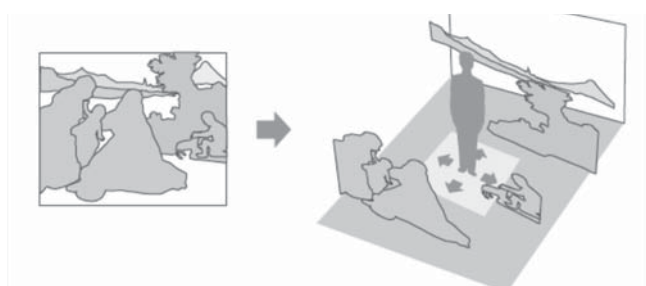
- ・目の前の作品のための説明に留まらず、ほかの作品・ほかの美術館でも鑑賞に役立つ「視点」を提供する。
- ・画面の中だけで楽しくなり過ぎない。
- ・宮殿という空間に融合する。
- ・故障に対する対策を講じる。

4. 開発事例紹介（遠近法の解説システム）

学芸員が絵画作品の前にして「この絵の中に飛び込んでみればベネツィアの濃厚な湿気が感じられる」と説明したことがきっかけとなり、ルーヴル側のスタッフとディスカッションし遠近法の技法や事実を教えるのではなく体験を提供することが大事だということになりました。まず、伝えようとする情報が鑑賞者にどのように受け取られ処理され理解されるのか、認知過程を調べました。

- ・両眼視差
左右の目が捕らえている画像のずれ。
- ・サイズ、肌理の勾配
見慣れている建物や敷石など実際の大きさを知っているものが小さくなっていく様子など。
- ・遮蔽関係
手前にあるものが奥にあるものを覆い隠す。
- ・明瞭さ
遠いものほどかすんで色あせて見える。
- ・運動視差
目、頭、体を動かしたときに物体の「見え」が変化することで距離を推し量る。
- ・体勢感覚
目からの情報だけではなく「少し上を見上げている」等の平衡感覚、筋肉などからの情報。

19以上の研究を見つけることができます。これらの研究の中から何を組み合わせ絵画という素材から奥行きを感じる事ができ、かつ「絵画の中の空間を想像する視点を与える」ことができる方法を検討しました。ここで重要となるのは、絵画の中の奥行き感を示唆することであって、地形データや建物のCGでリアリティを感じる仮想空間を作り出し、絵画の中の人物や建物の位置関係を知ることではないということです。最終的に選択したのは、運動視差・きめの勾配・遮蔽の効果で絵画を近景・中景・遠景に分割し舞台の書き割り状に配置しその中を歩き回る没入システム。俗に2.5次元と呼ばれる手法をとりました。



(C) Photo DNP

この仕組みは絵の中の空間を想像させる効果の他に、鑑賞者が自然に注目してしまう近景を視界から取り除くことで絵画の画面上では小さく描かれたディテールに注意を向けることにも役立つことが分かりました。鑑賞者がこのシステムを使った後、作品の前に戻り、各々が発見した絵のディテールを改めて鑑賞しグループ内で話し合う姿が観察されました。

そのほかのシステムも含め五反田で約6か月間一般に展示公開するとともに、アンケート調査・調査員による観察調査・グループインタビュー・システムログ解析からインターフェースやデータ構造の改善を行った後、2009年のルーヴル美術館内の企画展で展示されました。ルーヴル美術館の来場者はもちろん、日本まで来られないルーヴル関係者も多くこの装置を体験し好評を得ました。以来、工芸品部門・古代エジプト部門・絵画部門・古代ギリシア・エトルリア・ローマ美術部門の常設展示室に8種類の鑑賞システムを導入しています。

まとめ

「古典美術を楽しむためにはある程度の知識と努力が必要。ただ、事前の準備（努力）を来館者に、ましてや旅行者に求めるのは難しい。」この言葉には続きがあります。「美術鑑賞は楽しい。ルーヴル美術館でそのきっかけさえつかめればいい」のだといいます。

ここにマルチメディアの役割があるし、インタラクティブ性が重要なのではないかと思います。

たとえ、ルーヴル美術館に来るまでの間に、ある種の「努力」をしていなかったとしても、ルーヴル美術館の展示室で得られた知識やちょっとした体験が、美術鑑賞の「楽しさ」を発見することにつながれば、あとは鑑賞者自身が世界を広げられるだろうということです。

最後に、ルーヴル美術館の専門家の皆さんと長く仕事をする中で私が感じたことは、美術鑑賞の楽しみ方は自転車の乗り方に似ているように思います。一度乗れるようになると、なぜ乗れなかったのか思い出すことも説明することも難

しい。説明する側は楽しいことを実感しているのですが、楽しめなかったときのことを思い出すのが難しく、そのため来館者の目線に立った解説をするのに苦労するといったことが起こりがちです。我々（IT技術者）のような自転車にまだ乗れない第三者が参加し専門家と垣根を越え緊密なディスカッションをすることが来館者を鑑賞者に変える新しい美術体験を生み出すために必要なことだったのはこのためです。

私も補助輪が片方外れて、美術館から吹くそよ風を少しでも感じるようになってきています。これからも皆さんと共に新しい風を吹かせていきたいと思っています。

<http://www.museumlab.jp/>



(C) Photo DNP

〈指定討論〉

ロケ誘致による
フィールド・ミュージアム構想の実現

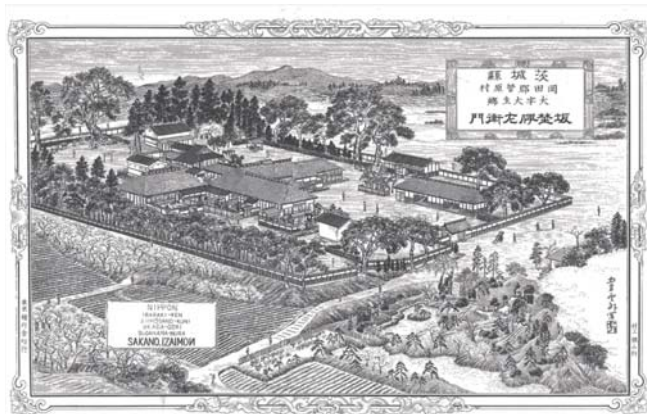
土井 義行（常総市役所産業労働部商工観光課）

1. 撮影隊に巻き込まれた理由

どんな街にも、地域の伝統や文化に育まれてきた歴史資産＝文化財がある。

その多くは「地域資源」として大切にされつつも、効果的に活用されているというには遠い現状にあるのではないだろうか。

私の暮らす常総市にも、国指定重要文化財の坂野家住宅や、千姫の墓がある弘経寺が存在しているが、いわゆる観光資源（＝観光客が常時存在するという意味）としては存在していなかった。そんな状況の中で、坂野家住宅については所有者から寄贈を受ける形で、その保護保存が自治体の責務に変化した。当然のことながら、国・県を巻き込んでの保存計画作成が急がれることになった。モノ（文化財）さえあれば、保存整備計画の作成は容易である。観光地であれば、少し気の利いたポスターやパンフレットを作成するなどの来訪者を呼ぶ手段も考えられる。しかしながら、観光地でもない、浮遊する来訪者もない地域にあっては、その存在を認知してもらうところから始める必要があった。



水海道風土博物館「坂野家住宅」を描いた銅版画
※明治23年作成／『大日本博覧図(明治25年発行)』所収

そのちょっと前の頃である。茨城県南西部に江戸の街並みを模したオープンセットを造る計画をもっていたNHKのスタッフがこの地域でTVドラマを制作すべく、ロケハン（ロケーション・ハンティング）に訪れたのである。今でこそ撮影隊誘致を図るフィルムコミッション（＝FC）がそこら中にあるが、当時はまだ「FC」なる言葉は、日本では市民権を得ていなかったように思う。当然、自治体にも撮影相談を受け入れる場所（担当課）があるはずもない。撮影希望の場所が“指定文化財”であるという理由だけで、おそらくは多くの場所（地方自治体）で同じように起こっていたように、教育

委員会の文化財担当者がその窓口とされた。違っていたのは、その担当者が実務の大変さより物事への興味が先に立つような“モノ好き”だったことだけである。



演出される坂野家(表門)

2. モノ好きの発想～文化財活用と撮影隊～

興味が先立って受け入れてしまった撮影隊だが、文化財の破損やご近所対策（騒音・野次馬）にかなりの配慮が要求される仕事だった。しかしながら、そのモノ好きな担当者には映画やドラマの撮影隊が飾る文化財が、彼らの作り出す映像が、大切に飾られているだけの文化財を、その文化財が本当の意味で生きていた（人が暮らすことにより活用されていた）時代を再現した展示に見えた。

動物園に例えるならば、動態展示である。さらには、映画やドラマを見た人々からの注目も集めることができた。もちろん、大河ドラマや連続テレビ小説のように観光地に早変わりするわけではないが、予算をかけずにできたPR策だったのである。

3. フィールド・ミュージアムへの展開

不思議なことに、撮影隊にはリピーターが多い。良き場所（彼らはロケセットと呼ぶが…）があって、受け入れ態勢さえあれば、リピーターがさらに拡大する。当初、文化財でのロケを目的に来ていた撮影隊が川や道路、公共施設など様々なロケセットを求めるようになっていった。こうした要望に応えるうちに、廃屋や空き店舗、使われなくなった公共

施設でさえ、その担当者の眼には有望なロケセットに映るようになっていったが、初期段階においては不理解と反論の多かったことも事実であった。

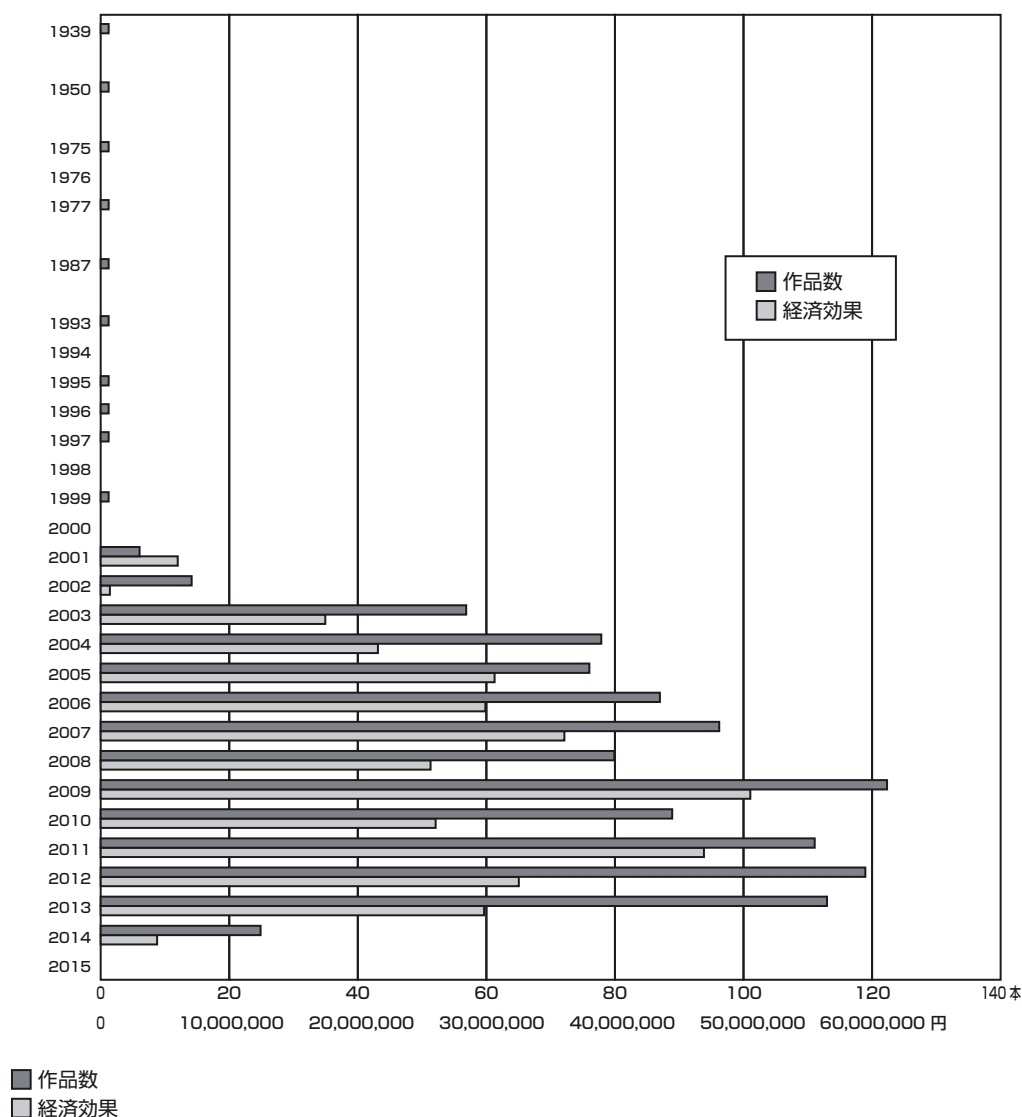
少し前まで博物館は、難解な解説を読みながら飾ってあるものを見るだけの展示施設だった。昨今は展示にも解説にも工夫を凝らし、様々なワークショップも開催される。ミュージアム・ショップに行けば、文化財をモチーフにした綺麗な小物が毎回増えている。ならば、建物や空間であっても、これを活かして使う方策があってもよいと思う。

撮影隊に彼らが求める“場所”を提供すれば、そこから映像作品が生み出される。文化財である建物では、それらが生きていた時代が演出される。普通に暮らす街の様々な場所が、映像作品を生み出すフィールドに変わる。そして、街はいつしか映像作品の記憶を留めた博物館に変わる。

4. FCのもたらした成果

常総市（かつては水海道市であったが…）のロケ誘致＝フィルムコミッション活動は、2013年に設立10年を経過した。FC以前の作品を含め、この街で撮影された作品は1,000作を超えた。細々と始まったロケ隊支援であったが、年間100作品・1万人の撮影隊を迎える事業へと発展した。もちろん、そこにある経済効果も見逃せない。CM換算で〇〇円というような怪しげな数値ではなく、撮影隊の消費活動は毎年3～4千万円の現金収入を街にもたらしてくれているのである。

斯くして撮影隊とのコラボレーションにより成立した「フィールド・ミュージアム」は、かつての商業都市の栄光に縋る斜陽の街に、僅かなりとも明るさを取り戻す契機となり、さらに経済効果をもたらし事業と成り得たのである。



フィルムコミッション事業による撮影作品数と経済効果の推移

海外交流事業

韓日研究国際フォーラム① 緒方 泉（九州産業大学美術館教授）

テーマ：報告「第1回韓・日博物館交流協力と博物館
経営マーケティング 国際フォーラム」

日 時：2013年12月14日（土）～12月15日（日）

場 所：大韓民国済州道済州島錦湖リゾート

主 催：韓国博物館学会、

韓国ミュージアム・マネジメント学会

主 管：韓国ミュージアム・マーケティング学会、

慶熙大学校恵静博物館、済州国際協議会

協 力：日本ミュージアム・マネジメント学会

参加者：約30名（日本側参加者：水嶋英治副会長〈筑波大学教授〉、高橋信裕理事〈常磐大学教授〉、緒方泉九州支部長〈九州産業大学美術館教授〉、黒岩啓子会員〈Learning Innovation Network代表〉、五月女賢司会員〈吹田市立博物館学芸員〉）

業にも大きく役立つものと期待しております」と述べられ、韓国と日本が政治的な関係でぎくしゃくしている中、博物館学を通じて新たな文化交流の場ができることを期待する基調提案も兼ねる挨拶となった。会場は約30名の参加者であったが、済州島はもちろん、ソウルからも博物館関係者が集い、とてもアットホームな雰囲気の中で会がスタートした。

その後、地元の済州大学などから歓迎の挨拶、そして日本側は水嶋副会長が答礼の挨拶を行った。

続いて日本側から発表を始めた。



金恵静会長（韓国博物館学会）の開会宣言

発表1 高橋信裕会員（常磐大学教授）

「地域を活性化した日本の博物館事例—研究を通じたミュージアム経営の考察」

戦後の経済成長の副産物として急激に数を増やした公共施設としての博物館であったが、そこに指摘される課題として「芸術文化を地域活性化の資源として戦略化する政策立案力の不在と不足、景気の動向と連動し、芸術文化をブランド化する地域経営の新たなマネジメント力の必要性が唱えられるようになった」と指摘した。

近年、芸術文化の所管が教育委員会から首長部局へと移管させる流れが生まれ、地域行政の舵取りを行う首長のもとで、民間活力の導入や整備及び運営資金の調達、経営統治能力の発揮などその手腕が発揮しやすくなっているという。そしてその背景には、「文化は経済活動において、高い付加価値を生み出すとともに、文化に対する投資や支出は、新たな需要を喚起し、雇用を創出するなど、経済を



国際フォーラム集合写真

1日目

主催者である韓国博物館学会の金恵静会長から開会宣言があった。

金会長は「韓国と日本の博物館マーケティングは、お互いの文化的環境と研究の土台が異なっているので、導き出される結論も違うでしょう。異なる内容でも博物館の効率的な経営には、一定の方向を提示してくれることと思います。今回のフォーラムが、今後の韓・日間の博物館学の研究作

量的にも質的にも発展させ、社会を活性化させる重要な基盤となるという思惑が働いているという。

こうした状況を踏まえ、神奈川県箱根ガラスの森美術館などの事例を紹介しながら報告を行った。

発表2 緒方泉会員（九州産業大学美術館教授）

「博物館学の多様化と深化—大学博物館を事例として—」

緒方会員は今後の博物館活性化を考えると、大学博物館の役割が大きいと指摘した。それは、2005年の中央教育審議会が従来の大学の使命「研究」「教育」に続く「第三の使命」として「社会貢献」を提唱したこと、そして2006年の改正教育基本法の第7条で「大学は、学術の中心として、高い教養と専門能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする」と規定したこととも関係する。

また、2013年4月の中央教育審議会は「第2期教育振興計画について」という答申で「絆づくりと活力あるコミュニティの形成」の基本施策に「地域の中核となる高等教育機関（Center of Community=COC構想）の推進」を提示した。これは地域課題の解決に向け、高等教育機関が有する教育研究機能を活用しようというもので、特に地域に開かれた窓口である「大学博物館」が地域のつなぎ役として役割を果たしていくべきであるという解釈もできると指摘した。

そして、「大学博物館が地域社会にどのように貢献できるか」について、九州産業大学美術館の教育プログラムを例に挙げながら、具体的に説明した。

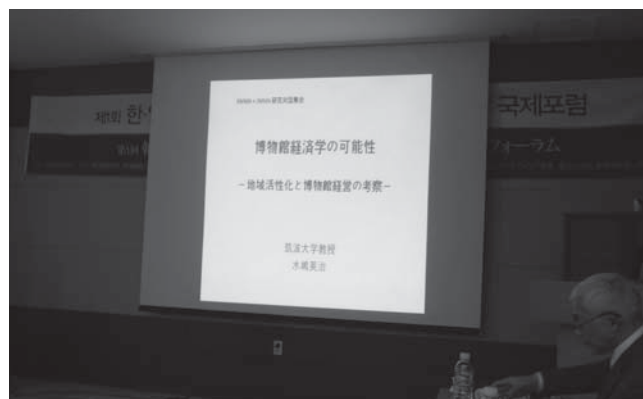
発表3 水嶋英治会員（筑波大学教授）

「博物館経済学の可能性—地域活性化と博物館経営の可能性—」

発表は2007年のオランダのPeter van Mench氏（元国際博物館学委員会<ICOFOM>委員長）との議論の紹介から始まった。氏は「博物館学は『博物館』だけのことを研究すればよいのではなく、周辺の図書館、文書館も、つまり知的資源や文化遺産、文化的情報学をも広く包含した学問が必要だ」と主張したという。そして現在、欧州では「博物館学Museologyから文化遺産学Cultural Heritage Studiesへ」という流れが広がりつつあるらしい。

さらに、博物館をAタイプ=動産としてのコレクションを博物館内で取り扱ってきた博物館とBタイプ=地域全体を経済

活性化するために「博物館」が拠点となり、動産コレクションに拘らない—シンボルとしての、建築的にも注目を浴びる博物館—の2つに分けて、従来の博物館経営学はAタイプのみで適用され、今後はBタイプについて新しい博物館経済学での議論が必要であると示した。そのため、博物館経済効果評価についての学術研究という視点から、国際的な視野に立った博物館学の精緻化を図るべきだとまとめた。



水嶋英治会員の発表

発表4 黒岩啓子会員（Learning Innovation Network代表）

「博物館学の発展方策と人材養成」

黒岩会員は「アジアにおける博物館学と専門職員の研修」に関する研究を進めている。今回は研究テーマに至った背景と課題をもとに、表題について検討を加えた。

まず、2008年2月の中央教育審議会答申「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について」の中に見られる「今後、博物館が人々の知的関心に応える地域文化の中核的拠点として、人々の生涯学習の支援を含め博物館に期待されている諸機能を強化していく観点から、学芸員及び学芸員補の資質の向上が重要」という部分に着目する。しかし、博物館法改正を受けた博物館法施行規則では学芸員制度の抜本改革には至らず、単位数の増加に留まったことを指摘した。また、非常勤講師として教鞭をとる学芸員養成課程を受講する学生の意識調査や英国・レスター大学大学院のSchool of Museum Studiesを修了した経験から、多少の単位数増加では十分な博物館実践や理論構築に至らないという問題を提起した。

さらに、我が国には博物館学に特化する学部、専攻などがなく、また学芸員養成課程も非常勤講師で支えられている実情を紹介した。我が国の博物館学が欧米の博物館の実践や欧米の研究者が蓄積してきた理論に拠って発展してきたところだが、今後は日本という文脈で、そしてアジアという枠組みで博物館学を捉え直す必要性を唱えた。

発表5 五月女賢司会員（吹田市立博物館学芸員）

「小規模博物館連携と地域社会」

1980年～90年代にかけて、日本では小規模の公立博物館（特に歴史民俗資料館）が国の地方版、そして多くが大規模博物館を縮小コピーしただけの存在として、トップダウン型で地方自治体により競って建設が進んだ。そして現在、特に小規模博物館は市町村合併や財政逼迫の中で無人化する（学芸員不在）傾向にある。そうした状況の中で、五月女会員は「小規模博物館は地域の人々が各々のアイデンティティを形成する拠点として、また地域課題の発見・解決の場として機能することが求められる。アイデンティティの裏づけとなる資料や情報を小規模博物館は守り、地域の人々も資料の価値づけ作業に加わる。そのことにより、地域社会の実態や要望に即した展開が期待できる他、地域の個々人の‘知’や‘経験’を‘集団知’として普遍化できる。またそうしたことを推進するために、小規模博物館同士が集まり大きなうねりを作り出す必要がある。1館1館ができることは小さいかもしれないが、それぞれができることや抱える人材また所蔵する資料などを、ネットワークを通じて「見える化」すれば、学芸員の知や人材が集積する場になるのではないだろうか。さらに小規模博物館らしいフットワークの軽い活動をボトムアップ型で広範囲に展開できるのではないだろうか」という提案を行い、大阪府を核に兵庫県、奈良県、和歌山県、滋賀県など関西圏を中心に、市民と共に歩む「小規模ミュージアムネットワーク」の活動事例を紹介した。

総合討論

5人の発表を受けて、趙漢姫先生（鶏龍山自然史博物館長）が司会をして、総合討論を行なった。主な質問・指摘事項をあげてみると、

【高橋会員への質問】

- 1 経済的に困難な博物館の割合は？
- 2 韓国は博物館支援制度があるが、日本はどうか？
- 3 日本は博物館が経済的にプラスのところはあるか？

【水嶋会員への質問】

- 1 博物館の収益が評価につながることは、文化施設である博物館に悪影響はないのか？
- 2 博物館を動産=Aタイプと不動産=Bタイプに分類したが、経済との関係はどうなるのか？

- 3 文化遺産学の話が出たが、自然遺産、さらに博物館技術学にも関心を寄せなくていいのか？

【緒方会員への指摘事項】

韓国の博物館は設置者で見ると大きく国立、公立、私立、大学博物館に分けられる。それらは設置者別にネットワークを構築し、またテーマ別の地域連合会もある。今後、大学博物館は地域社会との連携が必要である。

【黒岩会員への指摘事項】

博物館専門職員養成課程について、韓国と日本のは共通している部分が多く、今後共同で研究を続けていきたい。韓国は特に技術論の研究が十分でないため、日本との共同研究も検討したい。

【五月女会員への質問】

- 1 小規模博物館は公立博物館だけが加盟しているようだが、私立博物館はどうか？
- 2 小規模博物館の定義は曖昧ではないか？
- 3 小規模博物館ネットワークの規模はどこまで広がっているのか？



総合討論（司会：趙漢姫館長〈鶏龍山自然史博物館〉）



総合討論風景

海外交流事業

韓日研究国際フォーラム②

黒岩 啓子 (Learning Innovation Network 代表)

1. はじめに

2013年12月14日(土)と15日(日)に韓国済州島済州錦湖リゾートにおいて、韓国博物館学会、韓国博物館経営学会(KMMA)の主催、日本ミュージアム・マネジメント学会(JMMA)の協力で開催された国際フォーラムの第2日目プログラムについて報告する。

14日(土)の日本側発表に続き、15日(日)は韓国側からの発表日であった。当初は6本の発表が予定されていたが、事情により4本の発表となった。

①「博物館マーケティングの方向と課題」

趙漢姫 (大田保健大学 教授)

②「博物館学の文系学問としての地位と博物館専門人材の養成」

崔鍾浩 (韓国伝統文化大学 教授)

③「韓国地域博物館の活性化方策」

李正善 (慶熙大学校 惠靜文化研究所 研究教授)

④「済州博物館現況と振興方策」

金東燮 (済州抗日記念館 館長)

2. 発表内容の概要

①「博物館マーケティングの方向と課題」

趙漢姫 (大田保健大学 教授)

趙漢姫教授はKMMA会長で、鷄龍山自然史博物館館長でもある。韓国の博物館におけるマーケティングについて、韓国では2度目の発表になるとのことであった。

マーケティングは20世紀に営利機関を中心に広がったが、非営利機関である博物館にとっても重要な概念である。マーケティングは創意工夫をもって行い、マーケティング戦略はプログラムなどに反映されるべきである。

李明博政権時代に、国民の文化活動の促進と来館者層の拡大を目指して国立博物館入場料無料化政策が導入され、全国の国立・地方博物館に適用されることになった。その影響を受けた私立博物館が衰退し、生き残りをかけて新たなマーケティング戦略を検討する必要性が高まってきた。

そこで、韓国の博物館は、来館者が満足できる教育的な効果と健全な娯楽機能を兼ね備えた、文化を共有

する憩いの場・空間であるべきであるという「One-Stop Culture Center」という考え方を提唱し発表した。しかし、考古学、歴史学、民俗学の専門家にはマーケティングの意義を理解されなかったため、大学の論文として紹介した。

博物館に来館するというのは、目に見えない文化を買うということであり、博物館に人々が求めている様々なことを買うことができる。博物館は文化、休憩、教育、娯楽等のあらゆるものを提供することができる。21世紀の博物館は文化コンテンツを基盤として提供する国家ブランドとして発展しなければならず、そのためには効果的かつ魅力的なマーケティング戦略が不可欠である。

博物館が「行きたい、見たい、入りたい」と感じさせる魅力的な空間となり、異文化を理解し共有するスペースとなるためには、1) 目標設定、2) 顧客分析、3) 目標顧客選定、4) マーケティングミックス戦略、5) 持続的な統制と管理というプロセスをとらなければならない。

1) 目標設定

博物館にある様々な資源を調整しどのように活用するか、運営するかについて目標をまず立てる。

2) 顧客分析

どういう人が来ているか来ていないかについて調査するとともに、大勢の人が来館することで生じる問題はどのようなことがあるのかなど肯定的、否定的な側面を洗い出し、外部、内部環境を分析する。

顧客の特性カテゴリーとそれに対応するマーケティング戦略は以下の通り。

①現在顧客：博物館に来館する現在の顧客－より多くの魅力が感じられるように強化戦略

②潜在顧客：博物館に来館しない顧客－来館しない理由に対する原因を分析

③否定顧客：博物館を否定的に考える顧客－否定的な考えを持つようになった原因を分析

3) 目標顧客選定

博物館の規模、人材、財政、外部環境変化等を考慮し、効率的なマーケティング戦略を計画してターゲットとする顧客を設定する。

4) マーケティングミックス戦略

韓国では一人当たり平均1回以下の来館回数で、日本の博物館よりも厳しい現状にある。博物館は昔のことを勉強するところという認識を持つ人が多く、それをどう変革するかが課題となっている。そこで、複合文化空間としてのサービス戦略である「4S Marketing」という考えを提唱した。

Symbol (Product) : 夢、希望、人類愛、奉仕の精神

Score (Price) : 価値

Space (Place) : 時間的効用、場所的効用、ユビキタス
(いつでもどこでも教養を見出すこと)

Stimulation (Promotion) : 驚きや新しい期待を持たせる

5) 持続的な統制と管理

社会環境の急激な変化とともに顧客のニーズも変化し、従来の展示や教育方法では対応できない。そのため顧客分析を持続的かつ体系的に行い、課題の把握と対応方法を検討し続けることが重要である。

「4S Marketing」とプラスアルファをどう展開できるかという事例として、鶏龍山自然史博物館での様々な取り組みが紹介された。複雑化する社会の中で人々は癒しを求めているため、ヒーリングセンターも開設する予定であるということであった。

②「博物館学の文系学問としての地位と博物館専門人材の養成」崔鍾浩（韓国伝統文化大学 教授）

博物館学は人文的要素、社会科学的要素、芸術学的要素、自然科学的要素、工学技術的要素などが有機的に複合された総合科学であるといえる。

1991年に韓国で初めて大田保健専門大学（現在の大田保健大学）が、博物館専門職員養成のための博物館科設立許可を受け、1992年から2年制課程として運営しており、2000年からはデジタル博物館科に名称変更した。その後、いくつかの大学院で博物館専門職員養成のための課程が開講されているが、様々な課題がある。

まず、カリキュラム構成について見てみると、コレクション

管理、情報管理、博物館展示、博物館解釈、博物館教育、博物館交流、博物館販促、博物館経営、学芸研究（考古、歴史、民俗、美術からの選択制）となっているが、保存修復学が欠けているなど、ICOMが勧告する教科課程と比べると不十分な現状にあり改善が必要である。

次に、博物館学科が開設されている大学に、博物館学を専門とする専攻教授がほとんどおらず、時間講師（非常勤講師）や兼任教授という地位であるという問題がある。博物館学は人文学、史学、考古学などの関連学科のもとに編成されて、それらの分野の教授が主導している。そのため、教育内容が不十分な場合が多い。

韓国は21世紀の文化福祉国家を志向しており、1000か所以上の文化遺産関連施設や博物館で働く専門職員の養成と訓練が今後さらに重要となってくる。ICOMやICTOP（International Committee for the Training of Personnel）が勧告するガイドラインに従って教科構成と内容を改善するとともに、博物館に関わる各分野の専門的な知識と技術を持った博物館専門人材を輩出できる世界レベルの教育体制に改善していく必要がある。

③「韓国地域博物館の活性化方策」

李正善（慶熙大学校 惠靜文化研究所 研究教授）

メトロポリタン美術館での「黄金の国、新羅展」と韓国徳寿宮現代美術館での「韓国近代絵画100選展」に市民から大きな関心が寄せられている。これらの展覧会の共通点は、誰もが知っている有名な作品の展示であり、入館者に親近感、好奇心を与えることができるということと、莫大な費用が掛かっており予算の少ない地域博物館とは大きく違うということである。

韓国において博物館は古い遺物を展示する空間であると認識されていることが多く、博物館を積極的に訪問する人は限られている。このような状況で、地方博物館はどのようにして活路を見出せばよいのかということを考える必要がある。予算と人材が足りないことを理由にして援助を待つのか、観客の文化水準が上がることを待たなければならないのか。

方策の一つ目として、主婦を対象にして積極的な広報戦略を駆使することを提案したい。韓国の現代社会、経済において強い影響を持ち、特に子供の教育に影響力を持つのは主婦である。余談ではあるが、韓国では、3人の女性の声に耳を傾けるべきだといわれている。それは、「家内の声、子供のお母さん、ナビゲーションの声」である。主

婦をターゲットにすると家族で来館することにつながる。主婦の多くは博物館でどういうものが展示されているかほとんど知らないため、いかに博物館がユニークか、博物館でどのような教育ができるかを積極的に宣伝することが重要である。主婦はチラシを見てショッピングするため、博物館のイベントを知らせるチラシを作って新聞とともに家庭に配る方法がある。また、ポスターや垂れ幕は博物館にあるだけが多いが、人口が密集するところ、団地に設置すべきである。

二つ目の方策はストーリーテリング展示技法を活用することである。この技法は企業の商品宣伝（感性広告）など社会全般にわたって活用されている。事実は重要であるが、感性を刺激する話に人はより関心を示す。感性と共感が展示の理解度を上げるポイントとなる。

三つ目として連携教育プログラムの開発を挙げる。家族（家庭）、学校、博物館教育が連携して各種のプログラムを開発することが必要である。博物館では子ども連れで参加できる教育プログラムが求められている。また、生徒は学校と連携したプログラムなら必ず参加する。博物館教育は教養と品格を高められると宣伝すべきであり、それが来館者増につながる。

博物館は持続的に変化していかなければならず、研究活動に裏付けされるものである。そのためには安定した財源が必要であり、従来の事業活動だけではなく、企業とのコラボなど付加価値を見いだせる事業を開発することも重要となってくる。現代の人々の志向と博物館を結び付けて持続的な展開をし、文化交流の複合の場という認識を持たせることが大切である。

④「済州博物館現況と振興方策」

金東燮（済州抗日記念館 館長）

済州島には155か所の観光地があり、観光を主力産業にしている。島内には74の博物館があり、15が国立を含む公立館で、59が民間資本の私立博物館である。博物館は資料を活用し来館者と様々な交流をする空間を創出していかなければならないが、そのためには資金と人材が必要であるため、その振興方策について考察する。

まず、博物館の設立目的に則して所蔵資料の特色を活かした運営をするために、資料の収集管理、調査研究、展示、教育普及などを適切に行える専門人材が不可欠である。

次に、博物館は維持管理費と人件費だけではなく、各種の事業に伴う費用が掛かる。そのため博物館が自力で

運営できるようになるまで、運営資金の一部を支援する制度的整備と施行が必要である。

また、展示素材や技術が日々発展し、人々の文化に対するニーズも変化するため、博物館専門職員はこれらに常に関心を示し情報収集をしなければならない。

最後に、博物館の固有性につながる貴重な資料を、材料の特性によって恒久的に保存するための収蔵庫施設を持たなければならないが、その維持運営には専門的な人材と資金が必要となる。オープン収蔵庫にして入館者から一定の保管料を徴収するなどの在り方も検討すべきである。

このように、博物館が人々に文化体験の機会を提供できるように、様々な振興方策を模索しなければならない。

3. 終わりに

最後に韓国博物館学会の金恵静会長と日本ミュージアム・マネジメント学会の水嶋英治副会長との間で記念品が交わされ、両国における博物館のさらなる発展のために引き続き交流協力を続けていくことが約束された。

個人的な感想としては、私自身の発表が日本における博物館学の発展と人材養成に関することであったので、崔鍾浩教授による韓国の博物館専門人材養成に関する発表が特に興味深いものであった。博物館学の専門教員が少なく教育内容にも影響を与えているという共通の課題があるなど、韓日で共通して研究していくことができると感じた。

このように博物館という入口から対話を重ねることで、両国の相互理解を促しより良い関係構築につながることを強く実感したフォーラムであった。



INFORMATION

JMMA20周年記念大会開催日程・会場決定！

JMMA20周年記念大会の開催日・開催場所が下記の通り決定いたしましたので、皆様にお知らせいたします。

開催日：平成27年6月6日(土)、7日(日)
会 場：東京家政学院大学（東京都千代田区三番町22）

JMMAの次回大会は、20周年記念大会となります。
 会員の皆様には是非ご参加下さいますようお願い申し上げます。

なお、プログラム等の詳細につきましては、内容が決定次第、お知らせいたします。

新規入会者のご紹介

【法人会員】 三菱重工業株式会社

日本ミュージアム・ マネジメント学会 法人会員一覧

(2014年10月末現在)

株式会社アートプリントジャパン	東京家政大学 人文学部 教育福祉学科
アクティオ株式会社	株式会社トータルメディア開発研究所
公益財団法人 阿蘇火山博物館 久木文化財団	内藤記念くすり博物館
株式会社江ノ島マリンコーポレーション	長崎歴史文化博物館
カロラータ株式会社	株式会社西尾製作所
公益財団法人 交通科学博物館	株式会社乃村工藝社
佐賀県立宇宙科学館	株式会社文化環境研究所
サントリーパブリシティサービス株式会社	三菱重工業株式会社
公益財団法人 竹中大工道具館	ミュージアムパーク茨城県自然博物館
公益財団法人 多摩市文化振興財団	UCCコーヒー博物館
株式会社丹青研究所	早稲田システム開発株式会社
株式会社丹青社	(五十音順・敬称略)
公益財団法人 つくば科学万博記念財団	学会活動に協賛していただいております
東京家政学院大学	